

貞丈雜記

八之下

太政官文庫			
		一	和
		二	書
		五	門
		六	
		八	
三	架	函	號
二	冊		

內閣文庫			
		一	和
		二	書
		五	
		六	
		八	
三	架	函	號
二	冊		

內閣文庫		
番號	和	11568
冊數	32	( 16 )
函號	212	17



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

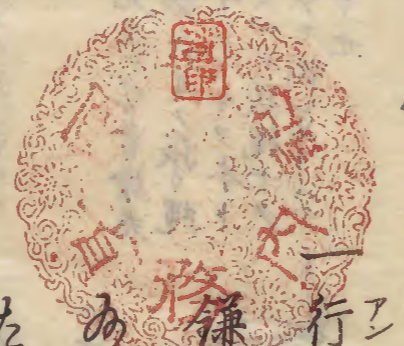
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007. TM: Kodak



南直庫



一行燈の事古ハ夜道をゆく時持る燈也トモビされバゆくとありヒト

鎌倉年中行事又鎌倉殿足利殿の正月吾管領のちとあり

あふり列を記して後松二丁行燈一ツもせべしとあり續松

たのまの也行燈ハ今の世とて用ひ何んどん也ちと云々

どんハ昔ハ夜道ハ持あはしむる物ハあらず中

燈臺トウダイハ木トウダイ又燭臺シヨクダイをトウダイ用ひ

く也但油盞アフラサラをアフラサラ用ひトウダイのトウダイ形トウダイ

高小トウダイとてトウダイ糸トウダイハトウダイ燭臺トウダイハトウダイ油火トウダイをトウダイ

臺ハトウダイ式也トウダイ燭臺トウダイハトウダイ畧儀トウダイ也トウダイ燈臺トウダイハトウダイ

臺ハトウダイ式也トウダイ燭臺トウダイハトウダイ畧儀トウダイ也トウダイ燈臺トウダイハトウダイ

臺ハトウダイ式也トウダイ燭臺トウダイハトウダイ畧儀トウダイ也トウダイ燈臺トウダイハトウダイ

雜記八

廿八

南直庫



紙を紙に裁き川  
ノケスキ出ス紙也又  
キ返シ紙也色ウス  
黒シ今ハ無之故於  
原ララス思フテ用  
ニ荒也也

徑三寸程  
先ヲ平ト切  
本ノ方ヨリ  
ヤホッキ心ニ

削て先の方を炭火にてあぶりて焦く焦く也焼て炭火にて悪  
く上よ油を引てあぶりて焦く焦く也紙を紙を廣サ五分斗  
裁て脂燭の布を丸巻するも脂の字をあぶりてしむ事あり  
松の木あぶりてあぶりて紙燭の字を用る  
又布を紙にて巻くもたのり紙燭の字を用る也  
元文の天子攝町院の大嘗會を行ひのひ一斗用て紙燭  
を成人武士小治政へあぶりてしむ事あり  
松の木を用るもあぶりて紙燭の字を用る也  
長サ七尺五寸ホド丸シ  
紙を紙に裁き川  
ノケスキ出ス紙也又  
キ返シ紙也色ウス  
黒シ今ハ無之故於  
原ララス思フテ用  
ニ荒也也  
先を二寸程あぶりてこがす  
油をぬりて又あぶりてこがす  
松のヒデを用りてあぶりてこがす

紙を紙に裁き川  
ノケスキ出ス紙也又  
キ返シ紙也色ウス  
黒シ今ハ無之故於  
原ララス思フテ用  
ニ荒也也

長サ七尺五寸  
ホド丸シ

一 掌燈と云事ヲ禁中ノ節會此ノ時主殿寮ノ官人片手に  
脂燭を持片手ノ小きちやうちのたぬあぶり玉菴を持下より  
指留紙受け持身ノ水殿の階を昇りて主殿ノ女官小  
さすを立角目交りて脂燭と玉菴を持て坐す所を掌  
燈と云 掌ハタナコ、ロ 右の玉菴の中ニ代りて脂燭をも入墨也火  
の下へ為へき用心は玉菴を持て下よりしむ  
一 蠟燭の事源順の和名抄燈火部曰蠟燭唐式云少府監毎年  
供蠟燭七十挺ト見タリ 順ハ延喜天 曆ノ比ノ人也 職負令主殿寮ノ令ニ云頭一人  
掌供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐洒掃殿庭及燈燭松柴燎  
○義解云謂油火為燈蠟火為燭也といふなり令大寶年中ノ令ヲ

養老年中ニ改ラレテ令也蠟火為燭と何るハラウヤク也此既  
ハ蠟燭あり令和名抄ありハ以前の書也ラウヤク上古より此也  
太平記下學集庭訓往來親元記康富記等も蠟燭の事  
見ララサレ共略物あり殿上ハ必油火を用ラリ也  
一 うち急ごともうちおきとも云物ハ金銀更ニ花がさあご色とも作  
里を物ハ廣がうよ小袖入る村のおさよも物ハ婚入記ハ  
見たり花の枝を金銀を赤て作らるる枝と云おさよはあく  
物故チおきとも云之橋の折枝ありあり

一 縮キメも布ヌも四方シバウ又廣く縮キメひつて先物をつむを古ハ平  
裏ツミといひ之殿中日記がともいづつこのるみえう今ハ縮キメも

物モノひるをぬくさとのひ布フ更ニ縮キメひるを風呂敷フロシキと云古ハ物  
くさめり表ウラと云名ハ物モノ更ニ縮キメひつてと云又縮  
まつむあごも事コトも日記ニありありきハ風呂風呂ハ入合時  
湯ユ殿ノはあきて湯ユよりあがるも時足トキをのぞく物モノハ物を包  
むハ布ヌを縫ヌひつげり形カタハ風呂風呂の表ウラあはゆるハ風呂敷  
といひあごハ一ヒトたる之近世キンセイの詞コトあり

一 香カウの道具カウいすハ香炉カウロ香盒カウバク火取ヒト香カウ火ヒ取ト火ヒ助カウ也カウ香カウ助カウ  
香カウをカウさカウさカウてカウのカウちカウ銀カウ葉カウをカウ香カウをカウさカウさカウてカウのカウちカウ銀カウ葉カウをカウ  
火ヒあヒちヒ香カウのカウちカウ灰カウをカウうカウけてカウ火ヒのカウけカウんカウをカウ香カウをカウさカウさカウてカウのカウちカウ銀カウ葉カウをカウ  
銀カウ臺カウ香カウをカウさカウさカウてカウのカウちカウ銀カウ葉カウをカウ香カウをカウさカウさカウてカウのカウちカウ銀カウ葉カウをカウ  
物モノ也モノいモノハ銀葉カウをカウハ火ヒがヒ指ユビをカウそカウてカウおカウけカウたカウしカウけるカウ物モノ

筋筋

文字不同  
ラフシキ故記

○火筋

○香筋

○銀ハサミ

○火アジ

○銀臺

青貝也是銀葉ノ  
マケタルヲ置ナリ

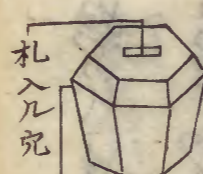
形サマク也銀  
ヲウスクナク  
タル也ヘリアリ

或ハ雲母ヲハ  
キテ銀ノフナ  
ヲ付タルモアリ

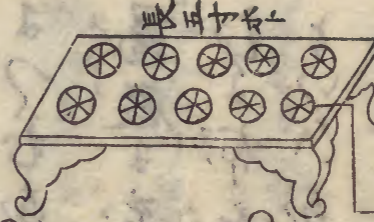
銀盤ト云ハ非也

香札 唐木也長八分  
一ヨリ十迄文字  
ヲカク也

繪マツ有  
客ノ字ノ畧シ  
ウ  
トカク也



札筒  
札ハル兒  
蓋アケ也



銀葉

同  
客ノ字ノ畧シ  
ウ  
トカク也

銀ハサミハ十種有リ昔ヨリ有

故香札ハ札筒モアリ今

の如ク結構ヨリ之盛ニ有リ

昔ハハサミノ如ク也

ハサミノ如ク也

ハサミノ如ク也

ハサミノ如ク也

ハサミノ如ク也

ハサミノ如ク也

ハサミノ如ク也

四方より灰をおく

五合と云ハ五方よりおた

香炉ハ灰をおく見方ノ

多クより香を盛りたる耐灰をおく

阿ハグク一層をおせハ香の

ハ後ハ焼く中たる物と

ハ扇形秋ハハハハハハハハハハ

ありハハハハハハハハハハハハハハ

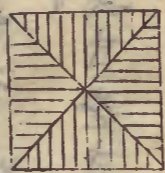
たる香の云ハ

宗信ハ東山殿時代の人也

雜記ハ

世三

四合



五合

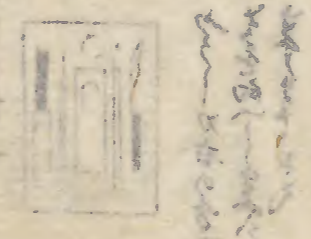


六合





○青梅アヲメ加羅也 ○飛梅トビウメ ○種嶋タチガシマ ○濔標シラツクシ ○月ツキ加羅也 ○龍田タツタ加羅也 ○紅葉モミヂ  
 賀ガ ○斜月シヤダツキ ○白梅ハクバイ真南也 ○千鳥チトリ加羅也 ○泫花ホツケ加羅也 ○老梅ラウバイ加羅也 ○八  
 重垣エガキ加羅也 ○花宴ハナノエン加羅也 ○花雪ハナユキ ○明月メイゲツ ○賀ガ ○蘭子ランズ ○卓タク ○橘タチバナ  
ハナニルサト加羅也 ○丹霞タンカ加羅也 ○花形見ハナカタミ新加羅也 ○明石アカシ真南也 ○須磨スマ真南  
 也 ○上薰ウハタキ ○十五夜シウゴヤ ○隣家リンカ加羅也 ○夕時雨ユウジグレ真南也 ○手枕テマクら ○晨明アサノアカ真  
カ加羅也 ○雲井クモイ真南也 ○紅ベニ加羅也 ○泊瀬ハツセ新加羅也 ○寒梅カンバイ真南也 ○二葉フタバ加羅也 ○早梅サウバイ  
真南也 ○霜夜シモヨ ○寐覺シメザル真南也 ○七夕タタタ真南也 ○篠目シノメ加羅也 ○薄紅ウスベニ加羅  
也 ○薄雲ウスクモ加羅也 ○上馬ノボリウマ加羅也 以上五十種 十一種五十種都合六十二種  
 之名香ハ慈昭院殿東山義政公 逍遙院殿三條西内大臣實隆公 志野三郎左衛門尉  
 信此三人談合有々天下の名香中辛一様ハ定め置りしと云々

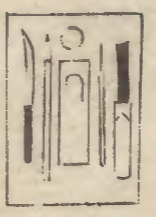


此の草紙云々の  
 此の草紙云々の  
 此の草紙云々の  
 此の草紙云々の  
 此の草紙云々の

一 沈ジンと云ハ今此キヤラの事ハ能き木ハ水ハ入急バ沈む也云々此香  
 と書ハ沈香シムカウと云ハ此より渡りし香也壺ウツハ此香を以テ木を以テ  
 して渡りし今ハ沈と他種とハ少遠也云々此香ハ陰木也加羅ハ陽木也  
 云々此香ハ占城チヤンシと云國より出也沈香ハ陰木也加羅ハ陽木也  
 今ハ用多シ沈香ハ氣を以テ香也加羅ハ葉を以テ香也物性の  
 遠ハ此より知る也  
 一 沈ジンの箱と云ハ沈香を入る箱也二重と云ハ上の香ハ沈香を入る  
 下の香ハ沈香を挽切ヒキキを鋸ノコギリ切ツギて入る也箱ハ梨子ナシヤ地蔴マキ  
 修堆朱シユ朱具アヲカイ沈香シムカウ金キンなりホ括ツギり不フ定



武雜記云硯管の  
の敷きたるは  
硯の管を敷きたる  
又華文状未忍の時  
の不用の硯一対並  
を撤一筆



く〜カ右の方へ  
を敷く〜カ右の方へ  
を敷く〜カ右の方へ

一 香と云ふ沈の事也今此加羅也其の葉を調合して〜  
 香と云ふ沈の事也今此加羅也其の葉を調合して〜

一 硯箱の筆箱キリ小刀並のおき不定な法式ありあき〜  
 硯箱の筆箱キリ小刀並のおき不定な法式ありあき〜

一 書札篇は公家武家祈禱供養事消息官達入部手紙の  
 書札篇は公家武家祈禱供養事消息官達入部手紙の

一 用之也古より手紙の筆を以て人をもり〜  
 用之也古より手紙の筆を以て人をもり〜

一 置村の混乱ワカ煩ワカが〜  
 置村の混乱ワカ煩ワカが〜

一 三光院内府三光院の正祀は筆小刀並一不  
 三光院内府三光院の正祀は筆小刀並一不

一 四孝の硯祝言の硯あ〜  
 四孝の硯祝言の硯あ〜

一 硯不可用之由見え〜  
 硯不可用之由見え〜

一 何の益もあき〜  
 何の益もあき〜

一 硯筆の筆ヒツと云筆婚入記あり硯筆の内は硯石の両方  
 硯筆の筆ヒツと云筆婚入記あり硯筆の内は硯石の両方

一 細き木を〜  
 細き木を〜

一 木作硯明月記云貞永二年六月三日其次云去春街硯目六三木  
 木作硯明月記云貞永二年六月三日其次云去春街硯目六三木

一 作ト書何物宇田被仰申云蓋上伏赤木無文其裏奇繪硯  
 作ト書何物宇田被仰申云蓋上伏赤木無文其裏奇繪硯

一 也ト申果而在之法感云〜赤木ハ蕪芳ノ木ニテ書具ヲスリ  
 也ト申果而在之法感云〜赤木ハ蕪芳ノ木ニテ書具ヲスリ

一 物ナルベシ。硯ノフタノ事ハ右ニ見エタリ  
 物ナルベシ。硯ノフタノ事ハ右ニ見エタリ

一 墨の柄ツカの事と婚入道具の事あり板イタと墨の改カの事あり  
 墨の柄ツカの事と婚入道具の事あり板イタと墨の改カの事あり

一 墨の柄ツカの事と婚入道具の事あり板イタと墨の改カの事あり  
 墨の柄ツカの事と婚入道具の事あり板イタと墨の改カの事あり

一 墨の柄ツカの事と婚入道具の事あり板イタと墨の改カの事あり  
 墨の柄ツカの事と婚入道具の事あり板イタと墨の改カの事あり

今昔物語卷十九云  
イカケ地ニ蔭丸硯  
ノ墨徳十ドモ世二似  
ガリケハ云々墨徳  
墨柄也

太平記卷卅五南  
方峰起ノ糸三云島  
入道至比常お批の皮  
腰高をて人ノ對面  
一けのをま〜と  
見る人ヤ〜と云々  
白山批のはの極高  
まむけの和とそあ  
らむれ〜と云

一 策のめく柄をう〜  
一 蔭法あど志るお  
一 墨板その柄さ〜  
一 以て  
墨をま〜  
一 手のよどれぬる也

一 うあ〜と云ハ物を煮る時福を〜  
一 物〜  
一 後〜  
一 福を〜  
一 角を

三 立るおを〜  
一 用る物〜  
一 江戸にていお〜  
一 今も糸大坂  
の人あ〜  
一 旧記よりあ〜  
一 古ハ足をり〜  
一 福をよ〜

一 鹿皮と引皮と習るも  
一 鹿皮ハ鹿の毛皮  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜

一 鹿皮ハ羚羊の皮  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜

一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜  
一 鹿皮を〜

一 上はあり毛の方  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜

一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜

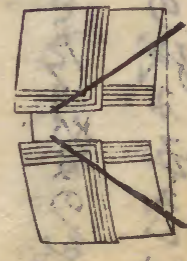
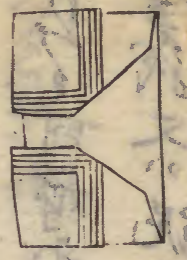
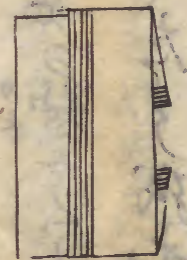
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜

一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜

一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜  
一 鹿皮の緒を〜

ハ系の職人也 一は折極め危と云又そのハ第よりあり

○まろひの紙



ハ通りを折る上の圖の如くあり

一 ちやうちなりと云物増入道具の記より麝香をまろひの紙  
小き茶碗の縁を折るおもしろ梅もやきおへ何れも唐物之麝香  
いけを折る此水あまよひ也木の志やうまう外ハ焼おの茶  
つるも内ハまろひをまろひは折る也

一 小見使生の耐犬箱を作りて小児のそばにおく事 犬ちりこ  
犬の性ハ正あつて一魔障を退る物之依之犬の形を作りて  
置也禁裏にて紫震殿清涼殿と云所敷の帳臺の中ハ

禁中元日の奇舎  
臣即位の時に  
犬のうらまは年  
人の官人犬の多き事  
を以て君をさるる  
可延喜式より

榮亮お後日  
のうらまは  
のうらまは  
のうらまは

こ満犬の後  
安沙即位は  
の圖はアリ  
考へ  
拍犬ハ兎ト云  
也トゾ一節アリ

拍犬を作りて又几帳の傍に拍犬をたむは魔几帳の  
むを風ふめきちりせきまのむをふも用也榮亮お後日  
帳の中ハこまのぬの目お光と云のあり又源氏物語枕草子  
有天子即位の時即位は天子のシマクイ兼明門と云門乃左右銅乃  
拍犬を置也是皆悪魔を退るの意なり也其用ハ門  
の扉を風よあをさせきまのむをふも用也拍犬と云ハ唐犬  
の形のことなり尾あがハ唐獅子の如くは作りて取の形お  
も拍犬を置也 此拍犬と云ハ子をあやめ  
光る人ありあやめりあり 犬けりこを小見の傍  
におくも拍犬の心あり 小見のまよをかきりておく耐犬の如  
くありてまよあやめり心あり

一 拵巾と云織物も織也油杯亦乱箱の下は也將軍位元

服記の何の櫛巾の圖 將軍御元服記云後櫛巾長六尺横三尺六寸兩面  
絲織色黄也御紋菱裏板引フシカ子漆也

此圖類  
聚雜要  
抄ニ見テ  
タリ

櫛巾長八尺弘廿二幅固文綾下漆裏  
濃打物凡櫛管具也櫛管用時用之  
加冠用時十疊天打亂管蓋置之

如此四方ニ五色  
ノ糸ニテ上サシ  
アル此事雜要  
抄ニ見テ  
書落シテハシ


髪の具を多く並ず櫛巾の上にあく下はおくお櫛巾の  
たとて赤乱箱を納め右浦坏尻境同着櫛巾ホの寸尺  
將軍御元服記と遠くうく極のおも時代もより家の  
傳承すもよまて一定の法はあらず大概を知る至る也  
カウヨリ ノリニツ

一 水引紙拾り紙水を引る也水引の紙拾り紙水を水

一 引と云也白く進物あらず結は白漆を用

一 薬器とのハ唐玉を入る器也法不のめくもえりも

あり堆朱ありしたる物之禊り茶を入る又帰花の茶器と

云ハ  此ハ形を付る云花びづのそり返る形取禊花と云

一 盆香盒印籠茶器茶器あらずの堆朱子茶器換り堆ハとり

とりとよむ字あらず朱漆をあつくぬりて漆粉をうづくもえりも

あげる也〇別紅と云ハこ海やの水雲菱輪遠あらず上

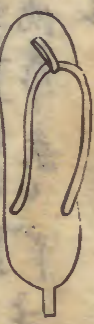
人形盆香花多あらず何の色赤〇堆紅ハ多赤〇赤〇赤〇

あらずとあらずあらずあらず筋何の〇金糸ハ色赤〇赤

ゆふ色と赤筋の筋あらず筋何の〇金糸ハ色赤〇赤

グク  
曲々ノ事當時ハ  
グリトバカリ云  
ハ俗語ナルベシ  
香盒或ハ根付十  
ドニ多クアル也

カ何の上もけりあも馬一悪金糸と云○紅花緑葉ハ花糸を赤  
 く枝糸を赤くぬりたる也○桂漿ハ赤糸ハけりあも赤糸糸糸  
 の筋何り又ニ赤糸も又地を赤くぬりたるも又地紅の桂  
 漿と云也地ハ黄漆也○犀皮ハ赤糸ハけりあも廣く淺く  
 赤糸もぬり糸の極よんぬり也堆鳥ハ桂漿の糸をぬり  
 とハ◎◎ぬり地ハ黄漆と云地も馬一○堆漆ハついで  
 堆紅のぐくは馬一是も地の黄漆見ぬ地も赤一○別金  
 常ノ日本も馬一玳瑁蔴給也玳瑁蔴給トハ今ト馬一交テ  
 玳瑁ハ今ノ世マベツカウト云物也蔴蔴ナドニスルナリ  
 右東山教法は唯お嚴記ハ見えり  
 一 緒太と云ハ蘭の糸履也常此ぬりの紙緒のさるるの緒を太  
 くと云也其中の糸を三寸廻り糸をさるる式正の装束  
 糸ハ今ノ世マベツカウト云緒太をぬりぬり糸をさるる蘭金剛と  
 毛蘭履も云之女の糸ハ緒細き也  
 一 げと云ハ草履の糸也  
 一 あんごうと云ハ草履の糸也  
 一 女ハあげをさるる緒太を男もさる也  
 一 志きれハ尻切と書草履を作りたる志きれ道志あり  
 時もぬり今ノ世ハ雪踏と云物ハ志きれをす移る物也  
 雪踏ハ平利休の志出ハと云近代の物也志きれハ昔より  
 あり也志きれの形ハ



あり也志きれの形ハ

一 檳榔の裏無のり太平記卷九主上上皇法 門主ハ長くとチタレ

檳榔毛車毛蒲  
葵ノ葉三三三

御即位時綾  
蘭笠モヒレウニ  
テフクナリ

〇らうあいの鳥



緒太と云  
あきぶを  
まじつよハ  
おひのり  
あまや(臭  
儲也

蘭を作る  
をあること  
と

長指の衣は檳榔の裏無を被る云々有今久あき緒あり

檳榔ハ蒲葵といふ木のり上古ビリヤウト云文字知レガリシユハ

蒲葵ト書也檳榔ハ別檳榔ト云字ラ 倣り用ヒタル也本字ハ

ノ木也子ハ菜種也木の形も葉も楡櫨の如く菜ハ志のり

よりのも長い白く枯せハ管ハ似たり葉もて作る

檳榔の表無といふ葉とみづうみのり緒太と云野官宰

相定基<sub>規</sub>云徳太是俗名とい上戸裏無を採ハ檳榔を用事

観應二年四月四日の園大曆二不見今ハ樅心草を編て作り

鴨沓カモグツのり公方様は成治<sub>元</sub>沓馬上沓をめさせ可なりたより

させ<sub>テ</sub>但鴨沓<sub>あり</sub>ハ右よりめさせ<sub>テ</sub>あり鴨沓と云<sub>鞄</sub>

あどの時月ある物也其形は<sub>も</sub>沓の臭光を丸く

作る物あり馬上沓あどの如く臭光をつもむ花の園の<sub>風</sub>

鴨沓  
之圖



親長卿記云明應五年二月廿一日親王御方沓

張行親王御方萌黄清水干以葛袴今鶯鴨沓

給云貞知天正記云沓のり右よりめさせ<sub>テ</sub>馬の時の沓を

ハ左よりめさせ<sub>テ</sub>馬の沓と馬沓の事也

沓丸切のり<sub>ハ</sub>沓をとり小刀也沓ハ沓めと云る五音<sub>連</sub>二本

一對の物ハ丸の<sub>ハ</sub>沓三寸五分斗也柄鞄ツカサヤあり唐木又ハ漆

ぬり沓給<sub>テ</sub>も<sub>ハ</sub>寸法本定<sub>ハ</sub>あり二本の内一本<sub>ハ</sub>沓の<sub>ハ</sub>

右又<sub>ハ</sub>沓の<sub>ハ</sub>沓を<sub>ハ</sub>沓<sub>ハ</sub>沓ヒキハ沓の<sub>ハ</sub>沓

極川百首惟明  
親王こやの地  
おろる鴨の  
つみき<sub>ハ</sub>

蒲團フタと云ハ高野のり高野蒲カマと云草の葉カマをカマくカマ組カマる物

也蒲團カマと云之今シトナの世釋の草カマを蒲團カマと云ハあやカマと云

一 團カマ座カマハ蒲カマの葉カマをカマ以てカマ丸カマくカマ平カマくカマ組カマる物也蒲カマの葉カマをカマ丸カマくカマ

繩カマ也蒲團カマとも云之是通例の麻カマ也ハ外カマハ公家カマと云用

らるゝあやカマと云托カマ一カマ種カマありカマ雅亮カマ装束抄カマと云あやカマと云カマ

手カマのやうカマあやカマのものカマもカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

あやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

らカマのカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

あやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

ありカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマの葉カマをカマ以てカマ丸カマくカマ平カマくカマ組カマる物也

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ

一 蒲カマと云ハ細カマき板カマをカマ丸カマくカマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマあやカマと云カマ





海人藻衣云雨具  
之事雨皮生縮  
漆用之輿車同  
但不有大小也  
張進車用之者也  
補  
春日權現驗記之  
雨皮之図

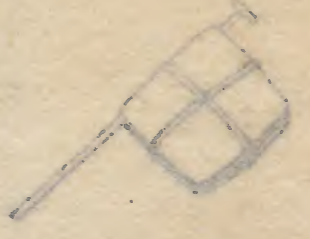


差油裏白生縮近代面裏練之薄青漆ルラ不差油為尋常ヨソツチト云一  
公卿以上僧綱用之張ハリ庭殿上人以下凡僧用之○貞丈云右雨皮  
ハ車ノ雨覆ノ油單也古書ニ參内ナトノ行列ニ雨皮持トアル右  
ノ雨皮ヲ持ツ役人也又謠抄ニ云雨皮カタバコ形箱ノ車雨皮ハ厚紙を  
四枚つぎて油を引也先達ノ名を書付て山野ノ張て宿ミツガン也  
牙子チヤハ毛チヤより小くチヤ也形若ハ佛具を入ル若也密函と云  
也長サキ尺八寸横六寸深サ六寸也若尺八寸ハ十八界を表ス六  
寸ハ六天を表ス又六寸ハ六波羅密を表ス○貞丈云是ハ山伏ノ雨  
皮也也テ雨皮ト云ハ雨障ノ用意ノ油單ノ車也根本ハ毛皮ヲ  
用タル故雨皮ト云フ也

為ヲノ布ヒトエの單ヒトエは油を引板油單ユツシといふ也後ハそれハあざアザと云  
油を引ユツシをもゆユツシと云之走ウツシ元故家コトハ一番法物ゴモツ也ヤン赤アカ股子マダラ又  
涉糸内シヤの義式云涉物十荷唐櫃カウのゆユツシけケ左右を引也云是  
等ハ油を引ユツシる物ハあア清少納言枕草紙マコトノハ油を引ユツシる  
と云人禁中イニは燈臺の油をさサすスとて燈臺カウのゆユツシけケはあア志シと云  
んの端ハタをハタをハタゆユツシけケはあア志シと云  
まマと云トゆユツシけケはあア志シと云  
これコレハゆユツシけケはあア志シと云  
不フすスと云トゆユツシけケはあア志シと云

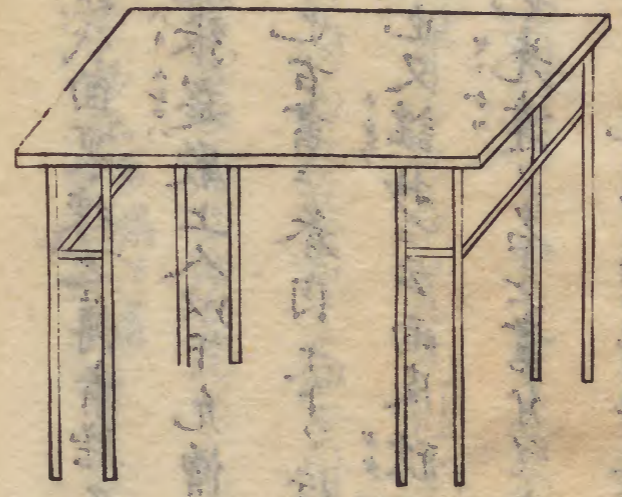
一 雨皮アメガハの車物具装束抄云車榻下藤雨皮オモテテ之車面練オモテテ為漆之

一八足の事年中恒例記六月晦日水無月後の条云齋藤将監仍  
 庭上祇候にて八足并御座のツカヒヤ也云々八足と云云  
 八足を付する案也八脚の案云物也禁裏にて神事の時  
 并へ供へる物并酒を外盛り物を載つゝ元也形丸の者  
 乃ぬ



八脚の案  
 白木也

元文大嘗會ノ  
 記ニ見タリ



一覽箱と云物ハ宣旨を入る文箱也源平盛衰記卷三十三頼朝征  
 夷將軍

宣旨東之関云累首箱ヲ奉入處の宣旨袋を傳取存ん左之の  
 子をかきぐる中畧

覽箱の蓋は砂金十兩入てき云々按る不覽箱

菓葛を以て作りたる菓あまし右の平文は累の字サ冠あき

傳宣の誤歟

一焼石と云今此温石の事也源平盛衰記卷四十五二位祿尼  
 女院ハ

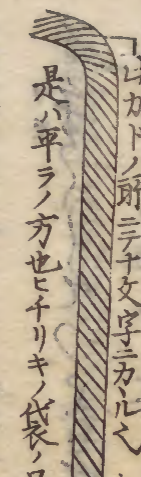
後れをりしと云焼石と云硯の菓とを左右の杖は

をまきしつゝそ海に入つてせ給ひる云々温石といふは唐の眞の  
 温石ハ自始と温ある物

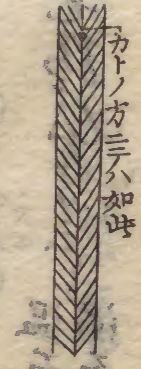
也と云そのおまき故  
 温石の石を焼て用ひ

一物の袋あどの端禮の小子の端あまき魚を焼る云々

近代の輩さいごのついでは古くは組紐なるをしかせるをしくもあをも



是ハ平ヲ方セニナリキノ袋ノ口杯ハ此也



平ノ方ノ正ハ面ナリノ文ヲ二重ニテ十ノ文ヲ二重ニテナリノ方ハ如此ナル也

今此こゝくさゆるりハあせどその畧也けつせぐも一色の多きも又

ハあるもてまをうぐも亦も他系の色ハ定めらるも母を又を

を交じりもかゞ鐘の胸板脇櫃等のうせ紐是也

一 紐ノ付ケ今ハ切ッケト云フノ紋のキヲしクハ丸ナりト右ニ此系を兼ハセテ

とおけりを今ハ志やちとうせぐ云ハれも古ハか紐と云ふ也

志ヤばうせいふせぐみを略スル物也

一 かつぬひと云ハスりと亦ハえ紋を結んだる亦ハぬひ

キトスハ只ぬひのと云ハスり物

一 唐櫃カラトハ二品ニあり長くひろき行ハひり之長きひり

長持ナガタテのめ長キ是ハ一ツを或人々ノ用ハスる物ナリ

形ノ亦ハ是ノ紐ノ長キ一ツを持ノ者亦ハ一ツを持ノ者ナリ

也何カモ唐櫃カラトハ足ノ布ヲ用フ紋ノ是ノ物也

一 土佐國ツクシマ安芸ヤマト郡ヒメツル東寺アキノ弘法ヒコノ大師ヲ開キ基也是ノ寺ノ大盤若紐を持

荷唐櫃カラトハ細キナリ

○ かつ横ヨコ寸ハ八寸 〇 因際式シキ寸ハ六寸 〇 身ミ熱ネ服ヒツ寸ハ五寸 〇 足タ言コトサキ寸ハ六寸

〇 是ノ言コトサキ寸ハ六寸

かゞ櫃フタあり足は  
もつと寸法ハ  
されど大概の  
物ハハヒトナリ



押切テ北ノ方ノ文一  
美ソ引返シ云々

一 道具と云詞ハ家ノカギモノヲ用ル物也云々ノ儒者  
ハ文章ノモノヨリ具ノイハルカ

具也武士ハ禮由鐵モ刀ヲ矢太刀ノコトノ物ノ具ハ武ノ道ノ具

出家ハ念數拂子証鏡後ノ物ハ佛ノ具也大ニ鋸ハ手鎌  
テラノ

手斧也工匠ノ道ノ具也此外准知ビレバ武士ノ物ハ  
道具ト云ハ武器ノモノノ武士ノコトヲ云フ也

具ト云フドモ大ニ道具ト云フハ外也知フ  
道具ノ符繪令具也其ノ後ノ草子ヲ見ク也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也

一 草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也

一 草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也

一 草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也

一 草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也

一 草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也

一 草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也  
草ト云フハ草ノモノヲ云フ也

雜記八 四十七

をあらはせとぞ見ゆ。右のつれもまうと云ハ付の字也買入を  
付之町の字とむはるハあやまりあり

一古書のみあがうつまこと何ハ油杯とも油蓋とも書テ燈の油を入  
る油皿也あがうつまのまの字まみれすむび〜まらハ氷あり

油次ツギといふありて 油を分瓶をハ油滴とも  
あがうつまのまもそ〜

一硯箱香匣スリバコカワバコテハコもね外蔭繪マキエの蔭絵ありて書と云ふあり筆  
テカキ

手と書之香包の紙あどもあ〜手書をする〜何〜せがき  
とハ古書などをあ〜ハ文字と蔭を交マゼて書〜た〜ハバ○

何〜びきの山と〜をあげおきえ我々の人をきれうとぞ

む〜といハ歌をあ〜ハ丸のごと〜

又ハ待た〜を〜る〜あり



かのめありわらふ  
文字と蔭を交  
ておち〜〜とぞ  
ありち〜〜蔭書  
何う法武あ〜も  
あきさ〜はあ〜  
ハ道達院内府  
実陸公の云月兩  
記は〜とあり

一まのま〜ハ衣服イフクを〜るサネ竿のま〜夫木抄のあ〜ハ○慈徳和為

あ〜とあ〜とあ〜の枝はあ〜もあ〜のま〜のま〜のあ〜ばあ〜づら

ま〜ハ能因ノルのあ〜海やあ〜のあ〜れきぬあ〜をみ〜の松ぞ

ま〜ありらる○源兼昌ぬれらるも今ぞま〜きふ〜けて不す



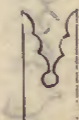
或説は猪の目乃取也云此れも猪の目より似るるあり又

一説は下<sup>イン</sup>の目也両手の大指と大指人さし指と人さし指合せ〇

此の形を以て日輪の印相と摩利支天の印也云用ひ

倉<sup>クラ</sup>の字 古人の物な名付のいやく近きるを以て名付るん

一はうらの車小刀の柄墨の柄<sup>エスミ</sup>外の器もさういふか金物をか

くも也云取<sup>ク</sup>  此也さういふかさういふかさういふか

畧<sup>リョウ</sup>とさういふ也右のくも柄の形見ると云おのくもを開きたるふ

似る故の名也應仁記は花御覧 寛正六年三月花頂若王子大原野ニテ東山殿花見ノ車ヲ云也

ノ結構ハ以百味百菓ツリ御前ノ御相付衆ノ筋<sup>ハシ</sup>ヲバ金

ヲ以テ展<sup>ノブ</sup>之御供衆ノ筋<sup>ハシ</sup>ヲバ沈<sup>シジ</sup>ヲ以テ削<sup>カサリ</sup>之金ヲ以テ逆鱗<sup>サカワニガキ</sup>ロラ

カク云く 岡本記ニ鞍ニ逆鱗<sup>サカワニガキ</sup>ロラ入ト云下見タリ是ハ鞍橋ノ

一 鞍<sup>カモノカ</sup>羊皮<sup>カモノカ</sup>にて作りしるもぬをかもと云く又襦<sup>シラ子</sup>と云字の音ハ

にくとよむ也鞍羊皮ハ襦<sup>シラ子</sup>ある故鞍羊の車を以てとも云也

拾遺和歌集雜の歌ト云能<sup>ヨシノブ</sup>を車のかもをこひつらハ侍

まをさし侍<sup>侍</sup>す<sup>侍</sup>し<sup>侍</sup>て侍<sup>侍</sup>り<sup>侍</sup>を<sup>侍</sup>れ<sup>侍</sup>ハ<sup>侍</sup>後京仲文<sup>鹿</sup>かをさして馬と

いふ人ありなれハかもをさしとおもふ<sup>鹿</sup>と云く<sup>鹿</sup>能<sup>鹿</sup>をさして馬と

といふをむむもや思はん志のやもさし<sup>鹿</sup>かもん<sup>鹿</sup>右車の

かもん<sup>鹿</sup>以て車<sup>鹿</sup>をさる<sup>鹿</sup>時<sup>鹿</sup>久<sup>鹿</sup>く<sup>鹿</sup>鞍<sup>鹿</sup>羊<sup>鹿</sup>皮<sup>鹿</sup>の志<sup>鹿</sup>を<sup>鹿</sup>以<sup>鹿</sup>て<sup>鹿</sup>あり

漆塗<sup>ワルシユリ</sup>の鞍<sup>クラ</sup>子箱<sup>コハコ</sup>硯<sup>イン</sup>茶<sup>チヤ</sup>の類<sup>ルイ</sup>の昔<sup>コト</sup>給<sup>タマフ</sup>不<sup>フ</sup>平<sup>ヘイ</sup>文<sup>モン</sup>といふ古<sup>コ</sup>書<sup>シヤ</sup>不

見<sup>ミ</sup>え<sup>エ</sup>たり<sup>リ</sup>是<sup>コト</sup>ハ<sup>コト</sup>古<sup>コ</sup>書<sup>シヤ</sup>に<sup>ニ</sup>對<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>詞<sup>コト</sup>也<sup>ナリ</sup>古<sup>コ</sup>書<sup>シヤ</sup>に<sup>ニ</sup>對<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>詞<sup>コト</sup>也<sup>ナリ</sup>古<sup>コ</sup>書<sup>シヤ</sup>に<sup>ニ</sup>對<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>詞<sup>コト</sup>也<sup>ナリ</sup>

滋野井公光御説  
以銀簿押文則平  
文也



をき上げはさる也平文ハ多クせしむるは花の縁のてしと  
多様を著る前縁のりを云也

一 何の調度道具の事も思ひあつた文モシのまきをかるハ山等の可し用る

ゆいひハ衣服フクの調度テハモシ徳義文也服者ハ父母兄弟  
親族の死ハ付託

いむるハ太刀タチあも服志フクシのそくハ義ヨシなりハ也さるハ  
多ク合

調度テハ家の定紋ジヤクモン付りハ古代コダイハ近世キンセイのる也ハ古代コダイハ花ハを

多ハ草クサあも何ナニもあもハ定紋ジヤクモンと云ハおハ軍中イクサノナカの目メさるハ

多ハ本ホハ旗幕ハタマクむらりハ付ツるハ後ノチハ素襖ヌウチ衣服フク法ホウの調度テ

保元平治ヒョウゲンヘイジの以ヨリりハ付ツ始ハジ免マれハ死シ

一 散物チリモノハ車クルマ法ホウの器物キョクブツハおハつハ金物キンモノハ散物チリモノと云ハ古コ多タるハ也ハ

一 桃モモ花ハ葉ハ葉ハ一条イツジョウ兼ケン良リヤウ乃ハ車クルマの篇ヘン廂セウ車クルマの条ジョウハ散物チリモノと云ハメメツツキキラ

一 柄ヘ長チヤウ瓢ヒョウ字ジヤウラ用ヨウ也ハ水スイヲ汲ヒム谷ヤ也ハ鎌倉年セキヤウネン中ナカ行ユキ車クルマハ公方クウヘイ様サマハ

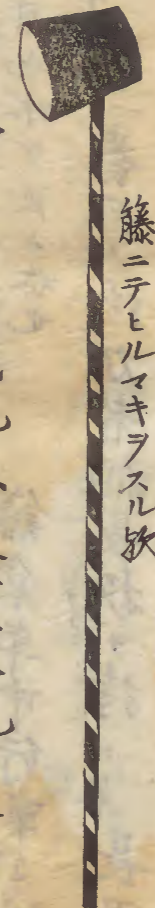
一 瓢ヒョウ右ミデ也ハ抄セウノ柄ヘハヒルヒルママキキララシシテハ柄口ヘカウノ金物キンモノニトニチチガガ子コヲヲ步フ越ク後ノチ布フ幅フク

ニテ包ツミミ柄ヘヲヲ卷マルルベシハ其中ナカヲヲ長チヤウサ一尺イツシヤクニ寸ニ黒ク草ソウニテニテ結ムス切キテテササゲ

ベジ是ハ夏ナツナドナド路次ロジニテニテ水スイヲ飲ヒンン時トキニ水スイヲ通トサンンガ為ハ也ハ

越後布ハ今ノ越後千々也水ヲ通サシ為ニ此布ヲ用也水ヲ通ストハ  
 水ヲコス也塵ヲ去ル也奥州後三年合戦ノ繪ニ義家朝臣  
 凱陣ニ馬ノク千ニ副テカ者ガ首丁頭巾ヲ  
 着テ柄長ヒサコヲ持タル射ヲエガケリ

柄長ヒサコ



藤ニテヒルマキヲスル欵

一 柄長抄ハ手巾を付テ薩戒記應永世二年九月十日ノ条今日  
 上皇御幸東山泉涌寺第中署次下北面六人着布衣一人持柄抄  
 在御右方抄黒漆蒔繪菊八重有金物付御手巾卷付柄懸  
 肩持也一人御劔在御左方云々柄長柄ハ手巾を柄ニ結付  
 奉之永九年合戦の繪も柄長抄ハ手巾を付テ袴を画  
 一のきこり馬尼のぬ

一 京極宮諸大夫尾崎大和守

説云昔遠所行幸ノ時抄ヲ  
 持サレハ幸有ク年中行事  
 繪巻物ニモ抄ニ手巾  
 付テ辨見エタリ是ハ畢竟  
 此手巾ニ用ラレシ物也



一 蛭巻ハ長刀の柄エムチあぶの糸をトク藤を以テ

巻也蛭と云虫の巻也ヒルマキまた云々云々  
 久て巻つけしもの蛭巻也蛭ハ細き虫あり糸細巻を蛭巻  
 と云張の蛭巻と云ハ張の輪を入る久又長きもの糸も長

其の形もやを交するも是ハ樺カバを卷く也是ハナナドノ入ヨコガエ

筆ヒナリキ葉あざむけの樺を卷くハナナドノ記也樺葉の形を

一 器物の飾ハ眼窓と云物あり三方四方の衝重ツイカ重

眼窓と云穴三方何れを三方と云 四方ハ穴あるを四方と云 是外何れも穴を飾りあける

ハ眼窓也ハの目あざむけ眼窓也

一 器の飾ハ牙像と云物あり机あざむけ脚アシ

ハ牙像と云脚ハ限らず何れも是ハ周礼ノ考工記礼記等ニ牙象ノ車アリ

一 器物の飾ハ青瑣と云物あり車の腰御倚子ゴイシ経机木の飾ハ

あり色青シ キサニ三角ハ フチ高ク丸シ 是ハ彫エリ中を録ロクセウ之古禁中ハ是



瑣門あり門の扉ハ此物あり成トヒラ一唐の天子も是瑣門あり

一 他博雅瑣連也前漢書元后傳注如淳曰門楣格再重如人

一 衣領再重裏者青名曰青瑣天子門制也師古曰青瑣者刻為

連瑣文而以青塗之也○韻會云凡物刻鏤ツタヤ胃結交加為連瑣

文者皆曰瑣非特門鏤貞文按唐ノ青瑣 ハ中ノ刻ミノ文 此方ニ云フアマスギア

ジロナトノ 形ト見ユ

一 ぬれがのり三好亭は成記云此茶湯有氷ささ水カ物立

火ヒぬれがはたあ赤墨也とん又東山殿ハ飾記云かた

茶碗の物モノぬれがはたあ赤墨也とん又東山殿ハ飾記云かた

別マぬれがはたあ赤墨也とん又東山殿ハ飾記云かた

云と何りされども東山殿飾記ハ茶碗ヤキモノ物モノぬれがはたあ

赤置トハ則赤枝  
ノ事ニテタナニ  
紙ナドヲオク耐  
重シニ置ニハリ  
ナシ置トシルセ  
シナリ

と何れも考れぬかきをかれど云あるべし  
かれど云あり大かろくもかれど云ありべし

後まきあふふきゴククの間をカクレガの  
かねをたすの間をカクレガのまき云其カクレガの間まき  
たのちのちゴククをうけし  
かと名付けしや  
つまじく詳あり

一 かき板元服のすむる品も板の板をひてくらひの板を  
の板をかき板と云い法板のまき板光をのせまき板を  
板と云を思ふかき板と云あるべし

一 かつこの物たる貞順を記しぬとの物も法を記しては  
置扇八十文字または墨へしと云ふ物の廣蓋のまき

一文箱古へ惣梨子地すて一面は舟楫をうたる物ハ公方板用ハ  
られし也移ハ惣馬ゆりすてかつこの上は草木のまき

一本すきあしすたす也常照愚草  
伊勢守 貞陸作 云文箱のすあり

か苦と何也 文箱の名文の大永頃の書は足元より  
ありし物ありれども文の大永頃よりあつた未だ

一 けしきとハけしきのぬのち渡器と書ありべし  
わすれと云きんけしきと云きんけしきと云きんけしきと云

一 けしきと云きんけしきと云きんけしきと云きんけしきと云  
けしきと云きんけしきと云きんけしきと云きんけしきと云

一 このまきのすま町南行筆記云学以所の器具足系多き所

庭訓往來云此外  
歩襖子金を提  
等々  
婚入記云ハソウ  
トヒサケノフ也云  
俗ニホキタラヒヨシ  
ゾウト云ハアヤマリ  
ナリ

齒くらのこの箱は提一對のうゑに一對きくはうゑと云ハ則ち  
ろをいれざるの箱のうゑにうゑの箱のうゑの箱のうゑの箱のうゑの箱  
いれと云をかきあらうと云也五音お道也ナニヌ子ノ てうぐとハ  
おとらざるをいれ物の特徴は少作りみだるひのやうにたる物  
てみるか則金杯のまじり糸のうゑに一つハうゑをいれ一つハ  
くをいれ又提と云はうゑのうゑに少ひきげのめくつ物を作  
る物は提と云はうゑをいれ提と云はうゑのうゑに提一對ハアルハ  
カ子ト水トニッ也

云此道可尋知也火取の圖を記す如し



火取ハ木ニ作り  
漆ぬりマキエアル  
シフタモ木ニテ作  
リアアノ如クス  
カシタル也キ、香  
ツトハ別也

一火取かづらのもり飯尾縮糸古ね漆成記云漆火取 白く根をも  
作りたる火取うら也これハにわひをくち替物に或は火取又  
ハ髪おどちめをさる可音をもむらゝ用也この火取香積り  
香おどたまそ人をあやむること婚入條に見えたり  
一おきうきとハ灰をかかへ形今世の女髪の具也ゞ海とて箱  
も似たり織テッとてうゑの箱を箱とて巻くとて歩聲日記

法身和山道具此注文の内なき如き見たり  
一説オキカキハ火カキニテ俗ニ云ジウノハコ

トナリト云フノ京都ニテハ  
 オキカキト云ナリ

一 ぶせごと云ハ少せごとの略後見竹とて箆を作リ紙とて張  
 而ハ穴をあける物也火鉢の上ハ衣の箆を懸て衣服の  
 志のりをと家抱へ法身和日記より少せごといふり拾遺貞外  
 卷上世首の内定家々のあうちよあつせごの志との埋火  
 又春の心やまぐりかよん  
衣ノ心マトハフセコノ香ヲ焼其匂ノカ  
 ウバシキラ柄ノ衣ノ匂ニタトテヨル  
 ナリ事物紀源舟車帷幄部晋東宮舊事曰太子  
 納妃有衣薰籠當是秦漢之製也ト見ユ西土モアリ  
 一 少せごのり又考て衣に記し類聚雜要抄ハ火取箆と云物有  
 此火取箆を少せごといふれ  
火取箆ハ木ニテ作り箆陰アリフタニ  
 上ニハ中ニカ子ヲシニ入テアミヲ作りカ

古今六帖火取  
 箆ハ昔ハ知不  
 相ノ物と我  
 火と箆をハキ  
 生一ヤウ

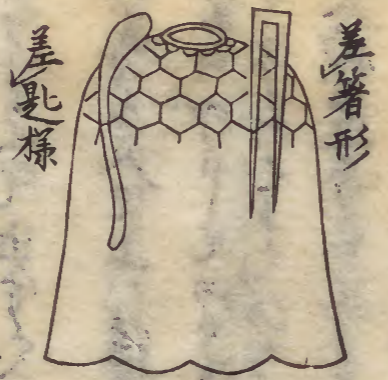
ケタル物ト見エ火取香炉ノ本式ナリ故  
 火取籠ハカゴヲフセタル如キ故ヲゴ云歟

火取籠

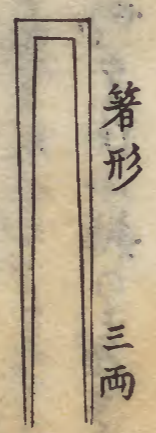


口弘二寸  
 高九寸五分

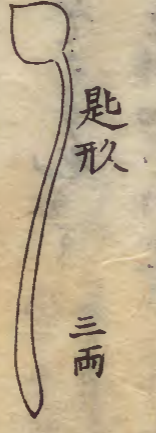
八葉八角  
 口弘六寸七分  
 糸金 銀廿六兩一分  
 如上下定  
 單功百廿足 糸金方  
 組料



差箸形  
 差匙様



箸形 三兩



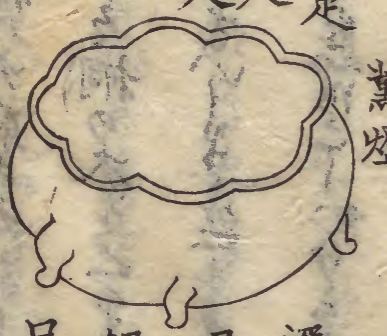
匙形 三兩

薰爐



薰衣香薪料 火取母

八葉八角  
 口白錫用途四兩  
 深三寸  
 蒔繪金五兩三分  
 漆三合四勺  
 口徑七寸三分



螺鈿料二百六十足  
 内掘料十足  
 内塚料五足  
 深一寸五分  
 足高五分  
 銀細工卅五足 鉢廿足  
 足十足  
 口徑五寸三分

雜記八

五十六



此はたきのまゝにばよげとよりかゝるはまゝの茶あてそのはよ  
かひおけはそとむとまゝ永享九年十月廿日室町殿行幸記云常  
法不具足法文はさう〜茶もき志中もき入る  
一 硯箱又硯蓋のり古〜の硯箱は物を入て人よも贈り又物あ入  
て人の茶も出〜きりとぞゆとより蓋のこ用るはたのこ也  
今の昔も硯蓋とてきり物もそのここの残るある〜  
日記上巻今〜とて出る日つらて〜  
〜のあき物か硯箱よとよりひよ入て〜更級日記  
云々おんの金箱とてきりひたる尋ね〜  
〜のひは茶のをあ〜たると〜

硯のあ〜入ておせ〜後拾遺集卷十五雜五後冷泉院の  
法時上東門院は法華阿〜  
硯の茶のあ〜は梅の枝入て〜  
よ〜  
月内裏御舎初度法書文書用硯硯蓋野行幸時用楊第  
云〜大鑑卷五云此花山院は風流者〜  
〜のけうら〜  
〜は硯の茶見給〜  
長足長あ〜  
〜のさゆ〜





貞丈雜記卷之八終

雜記八

九十九終

一 鏡箱カハコの事倍云かその室也イエ後撰集卷十九離別遠き園了  
 浦のりける人は旅の具つらけり鏡箱のりるるまらけりつら  
 りらるるおちかおのりすし身をつらむものからさす  
 こつみかけはうらこを思ふとらるる

一 鏡ウラモヤウの裏摸捺の事伊勢集云鏡のうらまはつねのうらまをぬく  
 まづりなれはちとせまなまのうらま浦すむあつらうを  
 見まづりける源信明集云鏡うらまをぬく志まの志ま  
 かきつておとすし阿あまこれこれのれはきしのかみまも面けは  
 のま人のんぬん 志まとハハ志まの  
包あま

一 混布コブの事永享室町殿行幸記云沂湯殿の上ま色しを

置中は混布箱 蔭繪とありは混布の事何は用ひの物もや  
 未考追て可尋

一 金鞭カナムチ 又ハ 鉄鞭の事走衆故實云と引をさし太刀をさき金鞭を  
 取りあよさけて糸ゆ也 中畧 走元とさびれたる村ハとと土小  
 つきして休へし カナフチを杖は  
つきして休まア 法興かきのからめ時の事志まこれハ  
 志まはあまぬねの長まはこらめ柄の先は木をさし  
 志ま又金をも入ると云 長さハ人の志まはあまぬね柄は柄の  
さし木をさし角をさし又如まも入ると云

發行書林

江戸

大坂

河内屋喜兵衛	河内屋茂兵衛	須原屋茂兵衛	山城屋佐兵衛	須原屋佐兵衛	西宮彌兵衛	岡田嘉七衛	和泉吉兵衛	和泉善兵衛	岡村庄助	須原伊八	和泉金右衛門	丁子屋平兵衛
--------	--------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	------	------	--------	--------

Vertical text on the right page, including a red seal at the top and several columns of handwritten characters.

